ずらした椅子が倒れる
自分だけは情けを持って美しくありたいと願う余裕もなく
背中を捨てようと　どんどん道を歩き
冷たいコーヒーで想念のすべてを飲み下しながら
どんどん道を歩き
緞帳が体を真っ二つに引いて
風が明けると
遠くのほうにぽつんと
動物たちの深い茂みで
一番汚くわたしが倒れていた
風の街

あのT字路を
左に曲がると水と星の幻が
道に　電柱に　車に
人に　木に　風に
宿る
わたしがたくさん書いた土地
遥か遠くから広大に聴こえる
石琴をうち鳴らすカラスの姿
ひとはそれを昔と言うだろう
薄暗い緑の窪みで
髪は暴れて　タキシードを乱して
青年がピアノを弾く
すでに顔はなく　天才である
ひとはそれを嘘と言うだろう

この脚は地面の筋肉を感じている
水と幻夢の気体でできたこの星は地球ではない